
キミ想イ。

黒羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミ想イ。

【Nコード】

N1854P

【作者名】

黒羽

【あらすじ】

レナと文人^{アヤト}は、幼い頃に仲良くなり、付き合いことになる。しかし、次々に2人の周りで事件が起こり、ついに2人を引き裂く事件が起きてしまう。

引き離された2人はもう一度会えるのだろうか……。

(前書き)

『キミ想イ』をクリックしてください、
ありがとうございます。

11月も後半になり、肌寒い日が続きますが、風邪などは引いてお
られませんか？

私、黒羽も風邪が長引き、なかなか辛いです……。

今回は温かな恋愛小説を書きたかったので、なかなか難しいで
す。

誤字、脱字等があるかもしれませんが、どうぞ最後までお読みいた
だけたらと思います。

告白。

…告白された回数は何回だろう？

その何回もの告白を全部断ってきた。

…キミしか好きになれない。

きつと、キミ以上にあんな興味を持つことなんか絶対に……無いんだ。

*

矢口 文人は、屋上にいた。

「あの…私ね。矢口くんが好きなの…。」

1人の女子生徒が、顔を赤くしてそう言う。

文人は、すまなさそうに答える。

「…ありがとう。でも、僕好きな人が居るから…。」

女子は、一瞬悲しそうな表情になって、すぐに笑顔を浮かべた。

「うっん…聞いてくれて、ありがとう…」

そして、走り去っていく。

文人はその後ろ姿をしばらく見送っていた。

屋上のドアが閉まる、鈍い音。

「……………はあ……………」

そうして、ため込んでいた息を吐き出す。

そのまま座り込みたくなる気分だったが、絶えて歩き始める。

これで何度目の告白を受けたのだろうか。

少なくとも今までに3回以上は告白を受けた。

当たり前前に感じるプレイボーイもいるのだろうか、プレイボーイではない文人にしてみれば、それは決して当たり前ではなかった。

「文人ー。」

ふと、名前を呼ばれて振り返る。

「また女子フツたのかよー。」

そこに居たのは、友達の拓海^{タクミ}。

いつも異常にテンションが高い、学年のムードメーカー的な奴だった。

…しかし、女子ウケはかなり悪い。

「フったってどうか……」

「モテない俺らにとっただらこの上なく嬉しいことなのに……」

「……そうだろうね。」

拓海の言葉を聞いて、文人はすぐに暗い表情になった。

ヤバいと思ったのか、拓海は慌てて切り返す。

「え、あ……そうだよな、文人の愛人はあのコだけだもん！」

「……うん。ずっと、あのコだけ……」

文人は、近くの窓に寄り添い、そっと空を見上げた。

放課後の空は、鮮やかなオレンジ色だった。

「……忘れないよ。」

思い出にふけりはじめた文人を見て、拓海は困ったように頬を掻き、
呟く。

「……ま、まあ。」

「済んだことじゃん、もう帰ろうぜ。」

こつこつ空気は苦手な拓海は、そう言って文人を促した。

文人は引きはがすように窓から視線を外し、廊下を見た。

「……うん。」

いつもの十字路。

そこまで差し掛かる。

「……じゃ、また明日な、文人。」

「うん。」

「あんまり気にすんなよ？」

「うん。」

拓海はかなり心配しながら、走り去っていく。

文人は、拓海とは逆の方向に歩き出す。

あんなふうに関心してくるのは嬉しいが、心配症な所が逆に困ってしまう。

「……………」

そうして、また小さくため息をついた。

家に帰ってから、しばらく経った。

夕食も入浴も勉強も済んだ。

特にすることはない。

あとは、自由な時間。

文人は、窓から星空を眺める。

「……………」

あの日見た、星空と同じだった。

「……………」

……そう。

拓海が言っていた、文人の一生の愛人。

その口とみた星空と、同じ……………」。

「……………」

忘れずには、いられない。

あの日の思い出。

今でも思い出せる。

…そう。今から約7年前のことだった。

父親が入院していた時だった。

病気だった父親に残された時間は少なく、母親と一緒に毎日のように会いに来ていた文人は、ある日退屈のあまり中庭に出て遊んでいた。

中庭を走り回って遊ぶのに夢中になって、文人は向こうから走ってきていた少女に正面衝突して転ばせてしまった。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫。」

文人の差し出した手を借りて立ち上がった少女は、満面の笑みでそう答えた。

「……名前、何ていうの？」

「アオキ青木 レイナ 怜奈。」

でもみんな、レナって呼ぶの。」

文人も名乗り返す。

レナはこの病院の院長先生の孫娘らしかった。

「ママもパパもお仕事が大変だから、レナはお爺ちゃんと暮らしているの。」

「……ふうん。」

肩まで伸ばした茶髪と、明るい笑顔が印象的な少女だった。

そんなレナを、文人はすぐに好きになった。

まだその時は、”恋”では無かったけれど。

あくる日、2人は病院を出て近くの公園に行っていた。

2人は2つのブランコを占領して、文人はどうして病院にいたのか話していた。

「…ふうん…文人くんのお父さんが入院してるんだ…」

文人から話を聞いて、レナはぼつんと感想を述べた。

「お父さん、元気になるかな……。」

文人はうつむき気味に、呟いた。

明るく振る舞ってはいても、内心は不安で壊れそうだった。

「……大丈夫。」

ふと、レナが言った。

「大丈夫だよ。きっと、レナのお爺ちゃんが助けてくれるもん。」

そして、にっこりと笑った。

「……本当？」

「うん。お爺ちゃんはね、何でも治しちゃうんだから。」

レナは得意そうに笑った。

その笑顔を見ているだけで、文人も自然に笑えてしまった。

こんなふうには、レナはいつも文人を元気づけていた。

レナ自身も、文人の父親がどんな状態にあるかは知らなかったが、文人に笑っていてほしくて、そう励ましていた。

レナは、文人に恋心を抱いていた。

文人は、まだそれを知らなかった。
自分自身が、恋をしていなかったから…

そんなある日、文人は病室にいた。
雨が降っていて、少し肌寒い日だった。

「……………あや……………」

ふと、文人を父親が呼んだ。

「…お父さん…大丈夫？」

何より不安で、文人の顔には心配そうな表情。

「……………あやに心配させるなんて、お父さんは無責任だな……………」
「え……………」

言葉の意味が判らなくて、文人は首を傾げる。

「……あやは、お父さんみたいになったら駄目だよ。……ちゃんと、お母さんを守る男になつてくれよな……。」

……まるで、文人に託すような言葉だった。

「うっん、僕ね、お父さんみたいに強くて立派な男になるの。」

文人は、父親の言葉を理解できずに言った。

「……………」

父親は、ただ何も言わずに、目を閉じた。
そして、言った。

「……あや。お母さんのこと、頼むからね……。」
「うん!」

……その一言が、文人が最後に聞いた父親からのお願いだった。

翌朝から、父親の体調が悪化したのだった。

二、三日が山だと言われた。

幼かった文人にも、意味は理解できた。

……父親がもうすぐ死んでしまうかもしれないということ……。

文人は、不安で不安で仕方なかった。

そんなとき、レナが傍に居てくれたのだった。

「大丈夫だよ…レナのお爺ちゃんが、きっと治してくれるもん…」

レナは始終そう言って、文人を励ましていた。

「……………本当……………？」

「うん。お爺ちゃんはきっと、治してくれるもん……………」

それから、二、三日が経った。

医師の必死の介護もむなしく、父親は帰らぬ人となった。

文人は涙ながらに、レナを責めた。

「何で！？助けてくれるって……………治せるって言ってたのに……………！」
「……………。」

レナはずっと黙っていた。

文人にも判っていた。

父親が死んだのは、レナの所為なんかじゃ無いことくらい判っていた。

…でも感情だけが先走って、レナを責めてしまった。

「……………何で……………」

そこから先は、もう言葉が続かなかった。後を追うように、涙だけが零れていった。

「……………ごめん。ごめんね、文人くん……………」

不意に、黙っていたレナが泣き出した。

「……………れ、レナね……………」。

少しでも文人くんに元気になってほしくて……………それで、嘘……………付いたの……………」

今度は、文人はレナを責めたりしなかった。

「……………ごめんね。」

そうして、レナの手をそっと握った。

「……………うん。」

レナは泣きながら、それでも綺麗に笑ってみせた。

その笑顔が、果たして文人に直接向けられたものなのかは、判らなかつた。

父親の葬式が終わって、一周忌、二周忌と月日は流れていった。

文人は父親に言われたとおり、母親を守っていくことにしていた。

そして、文人とレナは、まだ深い友情で結ばれていた。

そして、今日は待ち合わせをしていた。

…文人はレナを好きになっていた。

それでも伝えられないまま、今に至っていた。

温かな初夏の日差しが、文人を包む。

待ち合わせをしていた、公園に着く。

「…あ…文人くん、五分遅刻だよ。」

「え……ごめん。」

既にレナは公園に来ていた。

「今日はね、文人くんに言いたいことがあって……。」

レナは、不意に声を潜めた。

「もしかしたら、もう判ってるかも知れないんだけど……。」

「……いや、知らないよ。」

レナは、恥ずかしそうに顔を背けて、言った。

「……あのね、私……。」

ずっと前から、文人くんのが、好き……なの。」

「……」

「……だから……文人くんさえ良かったら、付き合ってください。」

……もう答えは決まっていた。

「……や……その……僕も、レナが好きで……」

「え……。」

思っても見なかったらしい文人の言葉に、レナは驚いた。

それから、にっこりと満面に笑みを浮かべて、言った。

「……レナたち、両想いだったんだね。」

とても嬉しそうに、少し頬を染めて。

文人もつられて笑みを浮かべて、言った。

「……付き合おう。」

…レナと文人は、”恋人”になった。

……それなのに、一緒に居られる時間は短かった。

微笑ましい新米カップルの仲を裂くような出来事は、少しずつ二人に迫っていた……………。

そんなある日。

あれからしばらく経った、夏の終わり。

もうすぐ終わる夜店に行こうと、レナと文人は決めていた。

夜店が行われる場所は、珍しく人気がなかった。

屋台を出している人たちも、客が来ないためか店を閉めようとしていた。

「…あれ…？いつもは人、いっぱい居るのにね…。」

不思議そうに、レナが首を傾げる。

文人も不思議に思いながら、まだ残っている店に目をやった。

「…良いじゃない、遊んでいこうよ。」

「……………うんー」

文人は近くの『金魚すくい』の屋台に近付いた。

うつらうつらとしていた屋台のおじさんは、来客にハツとして目を覚ました。

「やってくかい？」

「はい。」

「200円だよ。」

レナはやる気満々に、入れ物とポイを手にした。

「よーしー！」

ぱしゃ、静かにポイを水の中に侵入させる。

隅の方にいた金魚めがけてポイを動かすが、あっけなく逃げられて。

「あ……………」

ポイの上に出目金が乗り、来たと思ってポイを引き上げれば、ポイが破れてしまう。

「あーん……………ね、文人くん。もう一回、やっていい？」

「え、うん。」

レナは嬉しそうに笑って、200円を払い、もう一枚ポイをもらった。

そんなレナの横顔は夢中で、とても幼く感じた。

ぼうつとそれを見てみると、レナが悲しげに言った。

「また失敗だ……」

そうして、文人に向き直る。

「そうだ！文人くん、やってみてよ！」

「え……僕？」

「うん！」

文人は、応えて200円支払い、ポイを手にした。

「……………」

いとも簡単に、ポイに集まってくる金魚。

文人も苦なく、それを掬いあげていく。

「わ……文人くんすごい……」

レナが感嘆した声を上げた。

文人は計12匹の金魚を掬い、もらった金魚をレナに渡した。

「あげるよ。」

「良いの!？」

「うん。欲しかったでしょ？」

「ありがとう！」

レナは本当に嬉しそうに笑って、金魚を受け取った。

「…もう帰る？」

あたりを見れば、『金魚すくい』の屋台以外はもう無くなっていた。

「…帰ろっか。」

レナも応えて、2人はようやく夜店から放れた。

レナは金魚の入った袋を嬉しそうに見ながら歩く。

転ばないか心配になって、文人は言う。

「…転ぶよ？」

「うん。」

レナはちっとも分かっていないような笑顔で答える。

「だって、こうしたら転ばないもん。」

「…！」

レナは文人の手を握る。

それが実に何でもなし仕草だったのが、文人には不思議だった。

昔から思っていたが、レナは文人に対して驚くくらいあっさり接触してくる。

文人はレナの手を握ろうなんて、恥ずかしくて出来そうもないのに。

「……………文人くん？」

レナは不思議そうな表情で、文人の顔を下から見上げた。

文人の背が高いせいで、必然的にレナが見上げる格好になってしま
う。

「……………え？」

「ボーっとしてたよ？大丈夫？」

レナはしつこいくらい聞いてくる。

文人はただ、思いにふけていただけだったので、一言「うん。」
とだけ答える。

「そっか……………」

安心したように、レナの心配そうだった顔が笑った。

そんな時、ふとレナの携帯が着信を知らせるバイブ音を鳴らし始め
た。

「……………？誰だろ……………」

レナは不思議そうに携帯を開き、電話に出た。

「……………はい、青木です。」

レナは相槌を打ちながら、話を聞きだした。

どうやら知り合いからの電話だったらしい。

話を聞いている最中、レナが小さく息を呑んだ。

「……え……」

手から携帯が滑り落ち、地面に落ちて鈍い音を立てた。

「……………」

レナは蒼白な顔色で、文人を振り返った。

「……あやとくん……」

目には見る見るうちに涙が溜まっていく。

文人もただ事ではないのだと感じ、レナに近づいた。

「ど……どうしたの？誰からの電話？」

「……………」

レナは唇を震わせ、何かつぶやいた。

かろうじて聞き取れたのは、たった一言……

「……お爺ちゃんが、倒れた……って……………」

レナはそのまま泣き出す。

とにかく病院に向かおうと、文人はレナからお爺さんの居る病院を聞き、タクシーを呼んだ。

タクシーの中でも、レナはずっと泣き続けていた。

やっと泣き止んだのは、病院の待合室に入った後だった。

「……………ごめんね、文人くん。」

うつすら赤くなった目をこすり、鼻をすすってレナが言う。

「レナの事なのに、感情が先に絡まっちゃって……………」

申し訳無さそうに言うレナに、文人は首を振って答えた。

「……………気にしないで。」

レナは心細そうに笑う。

文人はレナの傍に寄り添い、そっと肩を抱いて自分の方へ寄せた。

……………初めての、文人からの接触。

そんなとき、ドアが開いた。

緊張した面もちをしているレナ達に、入ってきた医師は言いにくそうに言った。

「……残念ですが、お爺さんは助かりませんでした……。」

わっ、とレナが泣き出した。

文人は抱きついて泣きじゃくるレナにつられて、涙を流した。

それから、たくさんの手続きがあった。

お爺さんと二人暮らしたレナは、文人や親戚に手伝ってもらいながら、通夜や葬式の手続きをした。

そして、葬式と埋葬が終わったら、別の場所に住む両親の元へ帰ることになった。

葬式が終わり、無事に埋葬も終わった。

レナと文人は、二人きりで公園に来ていた。

何年前か、2人で病院を抜け出し、遊びに来ていた公園。

もうすぐこの公園は無くなる。

この公園は消えて、新しい公園を作り直すらしい。

「……………」

レナは、もう泣いたりしなかった。

「……文人くん。」

「……え？」

「……ちよつとだけ……遊んでいこつ」

レナは満面に笑みを浮かべ、言った。

文人は笑えなかった。

レナとも、お別れなのだ。

笑えるはずが、なかった。

レナは、文人の顔をのぞき込む。

笑顔が、くしゃんと歪む。

「……笑ってよ……」

レナはそう言って、目に涙を浮かべていた。

「レナだって……レナだって寂しいよ……」

… 大好きな人が、また1人居なくなる……」。

……そう。寂しいのは文人だけじゃない。

レナだって寂しいはずなのだ。

「……神様って意地悪だね。」

レナは泣きながら、笑った。

「大事なもののばかり、奪って行くの……
お願いなんて1つも聞いてくれないのに……」

文人も、微笑んだ。

レナは、笑って文人に抱きついた。

…それから、泣き出した。

「……やだ……」

レナはそのまま、泣き続ける。

「……僕だって嫌だよ……」

離れたくない。
放したくない。

いつまでも、文人とレナは抱き合っていた。

時間は、いつもより早く流れてゆく。

もつとずっと一緒に居たいときは、時間はすごく早く流れてしまうのだ。

「……文人くん。」

そんななか、レナが顔を上げた。

「……………ん？」

レナは、空を見上げた。

「……………あのね、レナのお爺ちゃんが言ったの。…空はどこまでも続いているの。だから、何処にいたって一緒なんだって。」

「……………。」

レナが何をいいたいのか、文人にも見当が付いた。

「……………空はつながってる。だから、きっとまた会えるんだよ…レナ達も。」

「……………うん。」

レナは、小指を差し出す。

「約束！」

そして、にっこりと笑う。

文人も小指を出した。

「……………うん。」

「また、絶対会おうね！…その時まで…レナ以外の子に惚れたら駄目だよっ」

レナは言って、笑った。

「……じゃあ、僕からも
僕以外の男について行かないでね。」
「もちろん！」

……。

…… 2人は約束を交わして、別れていった。

*

あれから、何年か経った。

文人は、そんなことを思い出しながら、ベッドから起き上がった。

「……………」。

今でも文人は健気に、レナとの約束を守っていた。

だからこそ、女子からの告白は全て断ってきたのだった。

「……………はあ……………」

文人は溜め息をつき、ベッドに潜る。

明日、学校に行けば否応なしに拓海は心配してくるだろう。

拓海がレナのことを知っているのは、文人が初めて女子をフって、その理由を聞かれたときにすっかり口走ったせいだった。

文人は何度か寝返りをうち、しばらくして眠りに落ちた。

「……………なあ、大丈夫か？」

次の日、予想していたとおり、開口一番拓海は文人にそう聞いてきた。

「ん？…うん、大丈夫。」

「…本当か？」

拓海は本当に心配そうに文人に訪ねる。

文人が鬱陶しがらないのを理由に、拓海は甲斐甲斐しく世話を焼くのだった。

「……………ていうかさ。電話とか、しないの？」

ふいに、拓海が聞いてきた。

「…電話？」

「あー…ほら、レナちゃんと。」

訝しげに問い返す文人に、返答に困って語尾を濁らせる拓海。

「……………電話できたら苦労しないよ。」

「……………だよなあ。」

ごめん、と拓海は呟き、頭を掻く。

その時ドアが開いて、担任が入ってきた。

「……………じゃ、後でな。」

「うん。」

…その日の放課後、文人のケータイに電話があった。

「……………？」

電話の相手は母親だった。

「お母さん？どうしたの？」

「……………が……………え……………きた、の……………」

「……………!？」

母親は電波の悪い所にいるのか、ノイズ音に消されて言葉が聞き取れない。

『……………え……………たのよ……………』

それだけ聞こえたと思ったら、電話はぷつりと切れてしまった。

おそらく電波が悪すぎて、母親が電話を切ったらしい。

「……………何だったんだろ……………」

文人は気になって、隣の拓海を振り返った。

「悪いけど……………用事できたから、先に帰る……………」

「おう。」

文人は踵を返して、家へ走った。

家に帰ると、母親の姿はなかった。

「……………?」

やっぱり何かあったらしい。

文人はカバンを置き、制服のまま外にでた。

「……………。」

特に変わったことと言えば、近くの空き家だった場所に引っ越しセンターの車が止まっていた程度だった。

「……………。」

しばらく、ぼうっと車を見ていた。

そんななか、誰かが文人の肩を叩いた。

「っ!?!?」

驚いて振り返ると、そこには母親の姿。

「あら、あや……………。」

母親は言って、時計に目をやる。

「まだ時間があるわ。」

…あや、聞いて。」

母親は文人の目をのぞき込み、言う。

「病院の近くの公園、確かまだあったわね……………行ってみてくれない?」

「……………わかった。」

文人は母親からの頼みを聞いて、公園に向かった。

公園は、まだ残っていた。

そして、公園には誰か居た。

明るい茶髪を背中まで伸ばした1人の少女。

公園の策にもたれかかって、空を見上げている。

「……………。」

文人は少女に歩み寄る。

「……………?」

少女が文人に気付き、こちらを振り返った。

「……………れ…レナ……………!?!?」

文人はその少女が誰なのか判って、思わずそう叫んだ。

「あ……………文人くん……………?」

少女も戸惑い気味に言っつて、文人に歩み寄つてきた。

「レナ……だよな？…青木玲奈。」

文人は半信半疑で聞いた。

「……うん。」

少女は、半分涙ぐんで、答えた。

「文人くん……」

数年ぶりに再会したレナは、文人に歩み寄つてくる。

「……文人くん！」

そうして、ぎゅっと抱きついてきた。

「……会いたかった……」

レナは言っつて、泣き声を漏らす。

「……僕もだよ。」

文人も、涙ぐんでいた。

「……駄目。だめだめ。」

レナはそのまま泣き出しそうなのをこらえる。

「泣いてたら、昔と同じだもん……
それに…せっかく会えたのに、泣いたりしたら駄目だよね。」

そう言っつて、レナは文人から離れ、にこつと笑った。

「……レナね。今日からこっちで暮らすことにしたの。」

レナは、どうしていきなり引越して来たのか、いきさつを話していた。

「お爺ちゃんが死んじゃって、レナはお母さん達と一緒に暮らしてて……お父さんがこっちの病院に勤めることになったから、此処に来たんだよ。」

「……ふうん……」

レナはブランコに腰掛け、言う。

同じように文人もブランコに座って、レナの話聞いていた。

「だから……これからはずっと一緒なんだよ。」

「……!?!」

文人は、喜びで泣き出しそうだった。

「…嬉しくない?」

文人の反応が乏しかったせいで、レナは不安げに聞き返してきた。

「……………うん。嬉しい。」

文人は立ち上がって、レナに抱きついた。

「……………もう、ずっと一緒だね。」

レナが幸せそうに笑った。

文人も幸せそうに微笑んだ。

改めて再会を果たした2人を、沈みつつある夕日が見守っていた。

*
*

その日の夜。

文人とレナは屋外に出て、手をつないで寄り添っていた。

「……この手が離れるのは、死ぬときくらいだね。」
「……うん。」

再会を果たし、幸せを掴んだ2人の聖夜を、夜空の星々達が彩って、その日は文人が見た星空のなかで、一番きれいな星空の日だった。

(後書き)

まずは、ここまで読んでくださった読者の方にお礼申し上げます。

駄文ばかりで読みづらかったかもしれませんが……。

少しずつ努力を重ねて、皆様が心暖まれる小説を書けたらなと思います。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1854p/>

キミ想イ。

2011年1月19日12時54分発行